

ひみつのかれん

く外国人お姉さんキャラにたっぷり愛されちゃう百合音声く

特典用ミニシナリオ&ボイス集 台本

「もくじ」

- ①『試聴用』ご挨拶
- ②『二年生の四月』初めて話した日（446文字）
- ③『二年生の七月』告白（321文字）
- ④『二年生の十月』ハロウィン（372文字）
- ⑤『二年生の十二月』本編の翌日（390文字）
- ⑥『二年生の十二月』秘密のアルバイト（658文字）
- ⑦『二年生の十二月』初めてのデート（491文字）
- ⑧『ちよつと未来』朝よ？（128文字）
- ⑨『ちよつと未来』早く帰ってきてね（194文字）

計 3000文字

「内容について」

- ・本作は、本編を補完するミニシナリオ&ボイス集です。主に、本編では描き切れなかったエピソードを収録しています。また、本編では明かされなかった設定が多数登場します。
- ・①は、公式ホームページにてすでに公開済みの音声です。
- ・②～④は、本編が始まる前のエピソードです。出会いからだんだん距離が縮まって、本編の状態になるまでを描いています。
- ※ト書きにネタバレがあります。本編鑑賞前に台本を読む場合は、同封のテキストファイル「セリフのみ台本」での確認をお勧めします。
- ・⑤～⑦は、本編より後のエピソードです。後日談として、本編よりさらに明るく楽しそうなカレンの様子を描いています。
- ※全編にネタバレがあります。ネタバレOKの方のみ、本編鑑賞前に台本を読んでください。
- ・⑧～⑨は単体で聞ける短いボイスです。カレンと一緒に暮らしている様子をイメージしてお楽しみください。

①『ご挨拶』

【明るく上品な雰囲気。転校初日、クラスメートに自己紹介するイメージで初めまして。カレン・ラングフォードよ。

恵波（えなみ）の島女学院の二年生で、イギリスからやって来た留学生です。

【本人としては事実を告げているだけだが、淋しそうな雰囲気がにじむ】
そう……。ずっと、ずっとこの学校にいるの」

②『二年生の四月』初めて話した日（446文字）

カレンの転入初日。

カレン、一刻も早く主人公と話したいと思っている。

カレン、昼休みになるなり、わき目もふらず主人公の席の前まで歩いていく。

主人公は自分が声をかけられるとは思わず、話しかけられるまで気づかない。熱心にノートをまとめている。

「あー！」

【主人公が驚いて顔を上げる。初めて近くで目が合ったので、カレンも緊張して声が震え、声がだんだん小さくなる】

そう！ 貴方。貴方に話しかけてる、の。

【そこで初めて、自分は主人公のことをよく知っているが、逆はありえないことに気づく。慌てて、午前中クラスの皆の前でしたにもかかわらず、再度自己紹介をしようとする】

あ、私転校生の……。

【「それはわかります……！」と言われ。「それはそうだった」と思った瞬間「主人公と最初に話すときはこうしよう」と事前に考えてきたセリフが全部飛ぶ。もつとうまくやるつもりが、緊張のあまり全然話せなくなってしまう】

あ、それは知ってるわよね。そうよね。

えっと……。あの、ね？ これからお昼だから……。

【絞り出すように。当然、知っていて聞いている】

食堂の場所を教えていたきたいのだけど……。

【主人公は、転校初日から美人で目立つカレンが、自分のような地味な存在に声をかけてきたことが信じられない。カレン同様緊張しており、なぜか敬語で「私でいいんですか……？」と聞いてくる。カレン、深く頷いて答える】

うん。

【緊張で一瞬間が空く。なるべく自然に聞こえるようにしているが、内心ドキドキしている】

貴方がいいの。

【主人公が目を白黒させているので、やはり唐突だったか。と思い、声が震える。今更ながら、自分の立てた計画の甘さに呆れてくる】

貴方をお願いしたいの……。

【しかし「私で良かったら……」と言われ。今度は嬉しさで声が上ずる。クラスがえがあったので、まだ教室内でグループはできておらず、主人公も特定の友達はいない】

あ、いいの？　ありがとう！　よろしくお願いするわ！

【主人公が慌てて勉強道具をしまい、立ち上がる。一緒に歩き出そうとすると、主人公が、朝から感じていた違和感を指摘する。主人公「……もしかして、足が？」と遠慮がちに聞く】
あ、ごめんなさい。そうなの。

私、少し足が悪くて……。

杖が必要なほどではないのだけど。あまり早くは歩けなくて。

【主人公、カレンを気遣うあまり「じゃあ、つかまってください！」と腕を差し出す】
えっ？　……いいの？

【しかし、主人公は『やってしまった』『いきなりこんな申し出をするなんて、距離が近すぎた』という調子で青くなる。すぐさま「ごめんなさい！　差し出がましいことを……」と今度は真っ赤になりうつむいてしまう。一方、カレンは内心舞い上がっている。やはり主人公は自分の思っていた通りの人だと感じる。嬉しさのあまり、一瞬間が空く】

ありがとう……。

【強く否定する】

ううん！　差し出がましくなんかないわ。嬉しい。

お言葉に甘えて。腕につかまらせてもらってもいい？

ありがとう。貴方って優しいのね。

親切な方と知り合えて、私安心したわ。

【小声でぼそっとひとり言。素が出る】

というか……思ってた以上に素敵なんだけど……。

【主人公に「どうかしました？」と聞かれ。咳払いして慌てて】

何でもないの。

それより……どうして敬語なの？

【距離を感じて淋しくなっている】

私たち、同級生よね。できればかしこまらないでほしいのだけど……。

【主人公が「ごめんなさい！　ああ、違う……っ、ごめんね！」と言ったので】
うん！　そうしていただける？

【とにかくこれが言いたかった、という調子で】

あと。私のことは『カレン』って呼んでくれる？

【主人公がドキドキしつつも「わ、わかった。カレン……？」と呼んだので】

ありがとう！

ふふ……これから、よろしくね！

貴方と一緒になら、私、とっても楽しく過ごせそう」

③『二年生の七月』告白（321文字）』

間もなく夏休み。

主人公とカレン、放課後、敷地内の森林公園を並んで歩く。

二人はすっかり仲良くなっている。

すでに、お互いに相手を友達以上に想っているが、相手もそうであることは知らない。

カレン、夏休みは完全に校内から姿を消し、帰国している体で過ごすことに決めている。

そのため、主人公は夏休みカレンと一緒に過ごせないことを知り、淋しく思っている。

主人公は、カレンのイギリスでの様子が気になってしょうがない。

恋人がいるのか確かめたいが、怖くて聞けずにいる。

それを知らないカレンは、顔に手をかざし、まぶしそうに顔にかかる太陽光をさえぎる。

「暑くなってきたわね。

お話ってなあに？

【「カレンは、夏休みイギリスに戻るんだよね……」と切り出され。実際は嘘で、これまで通り図書館に引きこもる日々なので、ぎくつとする】

うん。そうなの。夏休みの間は、一時帰国させていただくわ。

【カレン自身、残念でならない。内心「なぜこんな嘘をつかなくてはならないのだろう」と思っている】

だから、暫く会えないわね。

【主人公、『カレンには恋人がいる』という前提で質問すれば、あまり傷つかないし、自分の気持ちを悟られる可能性も低いと感じる。そのように訊く】

えっ？ 『お付き合いしている人に会ったりするの？』って……。

【強く否定する。実際は「いたことがない」なのだが、もてない女と思われるのもしゃくなので、言わないことにする】

いないいない！ いないわ！

【しどろもどろになる】

そんな人はいません……！

【「じゃあ、好きな人はいる？」と聞かれ】

カレン、自分の正体のことなどは抜きにして、なるべく誠実に応えようとするが、彼女自身自分の気持ちを測りかねている。

まだ「自分は主人公に恋している」「主人公が好きだ」と断言するには弱いような気がしている。

主人公に会うまでは、自分の恋愛対象は男性だと思っていたし、今も自分の嗜好が明確に変わった実感はない。

今はただ主人公と一緒にいるのが楽しくて、幸せ。「今後もっと深い関係になりたい」というよりも、「楽しい今を失いたくない」という気持ちの方が強い。

だから、絶対に両想いになりたいわけでもない。

そもそも自分は、芳しくない状況にある自分を変えるきっかけが欲しくて、主人公に近づいただけのような気もする。

「そのきっかけを与えてくれる相手であれば、主人公でなくてもよかったのでは？」

「毎日に刺激が欲しかっただけでは？」

と聞かれれば、否定するのは難しい。

ただ「いてもたってもいられなかった」「このままで終わりたいくなかった」という気持ちだけはあった。

自分から行動しなくては、主人公はずっと自分を認識することもなく卒業していった。

それだけは看過できなかったからだ。

つまり「主人公のことが恋愛対象として好き。恋人になりたい」というよりは「どんな関係で終わってもいいから、とにかく主人公に自分の存在を知って欲しかった」というのが最も近いのでは、と感じる。「現状を変えたかった」という目論見があったのも認めた上で、正直に告げる。

「好きな人は……わからない。」

【絞り出すように。実質的な告白】

ただ、私は。貴方というのがとても楽しい……。今みたいな幸せが、ずっと続けばいいって思ってる。

【複雑そうに。「私もだよ。カレンというのが一番楽しい。学校生活がこんなに楽しいなんて、カレンに会うまで知らなかった」と言われ。嬉しいが、一方で『これは友人として言われているのだ』と思うとなぜか胸が苦しくなる。自分の気持ちを決めかねているくせに、主人公に友人扱いされるとひどく傷つく】

貴方も？ 本当？ 私たち、一緒ね。すごく嬉しいわ！

【しかし、「ううん。一緒じゃないと思う。私はカレンと同じ気持ちじゃない」と言われ急に不安になる。主人公が何を言おうとしているのか見当がつかない】

え？ 『一緒じゃない』ってどういうこと？

【「私はカレンが好き。新学期の日、話しかけてくれた時から、ずっとカレンのことが気に

なっていた。一人の人として、カレンのことが誰よりも好きです」と突如言われる。主人公自身衝動的に発した言葉なので、お互いどうしたらいいかわからなくなる】

えっ？ あ……あ……そう、なの……？

貴方が……私を……？

本当……本当に？

【「急に言われて、嫌かもしれないけど。友達にこんなこと言われても、困るだけだってわかってるけど……」と言われ。強く否定する】

嫌じゃないわ！ 困ってなんかない！

【そこで、主人公の「一人の人として、相手のことが誰よりも好き」という言葉が腑に落ちる。難しく考えるあまりわからなくなっていたが、それは自分も一緒だ、と感じる】

私も一緒よ。貴方のことが好き……。

そう。一人の人として、貴方が大好き。

【嬉しいが、自分の正体のことを考えると絶望的な気持ちになる。思えば、自分は「人間」ではない。しかしここで自分が困ったような対応をすると誤解を与えたい、「嬉しい」だけを表現することに決める】

そうよ。私たち、つまり。

【『両想い』を特に嬉しそうに】

両想い、みたい……」

④『二年生の十月』ハロウィン（372文字）

秋。主人公とカレンは、すっかり周囲の公認カップルになっている。

特に特別視されることもなく平和に過ごしているのは、二人の手柄と、おっとりした校風も大きい。周囲は「そもそも、そこまで珍しいことでもない」という認識の様子。

ハロウィンの日、恵波の島女学院では、文化祭の前夜祭としてハロウィンパーティを行う。

校内は仮装した女生徒たちでごった返し、メイクが特技のカレンは、クラスメートたちにお化けメイクを施している。

主人公、カレンに会うため、メイクルームに使っている教室の扉を開く。

中には吸血鬼の仮装のカレンがいる。

カレンは座ったまま、主人公は立って話す。

「はい！ 次はだあれ？

あれ？

【嬉しそうに。自分はイベントごとが大好きだが、主人公は苦手だろうと思っていた。そのため、今日はほとんど会えないと思っていたが、予想に反して主人公が自分のところへ来て

くれたのが嬉しい】

意外だわ……貴方はこういうイベントごと、苦手と思っていたから。でも嬉しい。

貴方も私に、ハロウィン用のメイクをしてもらいに來たのね！

【「カレンのメイク、すごく好評だよ。みんな人間だったのがゾンビになって出てくるから、『感染源』って呼ばれてるよ」と言われ】

え？ ここ『感染源』って呼ばれてる？

入った生徒が皆ゾンビ化して出てくるから？

【「瞬間絶句するが、「言い得て妙だな」「スキルは褒められている」と納得し、素直に感心して】

……うまいこと言ってくれるじゃない。

【自慢げに】

そんな私の仮装？ ふふ、吸血鬼よ！ なかなかいいでしょう。

【冗談めかして楽しそうに】

皆の血を吸って、仲間にしちゃうから。

【「カレンと一緒になら、それでもいいよ」と言われ。「主人公と同等の存在になれたらいいのに」という自虐的な冗談のつもりだったが、主人公がどこか真面目な口調で言うので、まさかとは思うが、自分の正体を察し始めているのではと感じる。冗談っぽく聞こうとするが、内心ドキドキしている。自虐的に「化け物」を強調する。「吸血鬼」と言わないことでもかまをかけようとしている】

「それでもいいよ」って。いいの？ 化け物の恋人で。

【カレンの予想通り、主人公はカレンの正体を薄々察し始めている。ここは強く「いい」と言わなくてはならないと感じ取り「いい！ 人間じゃなくても大丈夫！」とはつきり言う】

あ、ありがとう……。

【このままでいると泣き出してしまいそうなので、「そんなにこの格好が気に入ったの？」と冗談を言って空気を換えようとする】

なあに？ 貴方ってば、そんなにこの格好が、

【言いかけたところで、ふいに主人公が抱きついてくる。予想外のことなので、非常に驚く。主人公がこんなことをして来るとは露も思わなかった】

あっ……は

【しばし沈黙。内心、嬉しくて泣きそうになっている。もしかすると、主人公はすべてを知った上で、それでも自分と一緒にいてくれているのでは、と期待してしまう】

あの……えーっと……。

抱きしめられていると。メイク、できないんだけど……。

【「どんだん恥ずかしくなってくる。お互いに顔が見えないまま、主人公の服を握る】

こんなところ見られたら……。

また皆に「バカップル」って言われちゃうわよ……。

【それでも主人公が離さないで、観念する】
もう……。

【しばらく間を置き。主人公であれば、自分の正体を告げても、受け入れてくれるのではと
感じる。心からお礼を言う】

ありがとう……。

あのね。いつか必ず……必ず、すべてを話すから。

その時も今と同じことを言ってくれたら……嬉しい……」

⑤『二年生の十二月』本編の翌日（390文字）

本編の翌日（正確には本編二日目の昼休み）。

主人公とカレンは、あの後どうにか食堂に紛れ込み、何事もなかったかのように午前の授業を終えたばかり。

朝「昼休み、改めて今後について話し合おう」と約束した二人だったが、いざ会うとお互いに昨夜のことを思い出して意識すぎてしまい、まるで会話が続かない。

【本編ではなかったほど、がちがちに緊張して】

えっと、あの。やっとお昼休みになったわけだけど。

【緊張のあまり早口】

あれからお加減はいかが？ 私はこの通り平気。まだ足輕いの慣れないけど。

【「私も大丈夫。すごく元気。でも、正直午前の授業は手につかなかったかも……。カレンのことばかり考えていたよ」と言われ。ひとまず主人公の体調に問題はないことに安堵する】

本当？ 良かった……。

私もよ……。

授業なんて手につかない。ずっと、昨夜のことばかり。貴方のことだけ考えてた……。

【一瞬ロマンチックな雰囲気になるが。よく考えたら自分のそれは今に始まったことではないと気づく。主人公に隠しごとがなくなったので、途端に口が軽くなっている。やや間を置き、自分自身につっこみを入れるように】

いや私いつもそうね？ この学校の授業なんて正直飽き飽きよ？

【落ち着こうと一呼吸置き】

えーっと、そうじゃなくて。

これからのことなんだけど。

私が、貴方に会うまでどう過ごしていたかとか……。

私が学校生活を送れるよう助けてくれていた……私の正体を知る唯一の人。
この学校の学**院**長のことか。

※「恵波の島女学『院』」なので「学『園』長」ではなく「学『院』長」になります。誤り
やすいのでお氣をつけてください。

順を追って、貴方に話したいって思ってるの。

驚くこともあるだろうし……。

私、貴方の前では相当格好つけていたから。

素の私を知って、がっかりすることもあるかもしれないけど……。

変わらず一緒にいて、くれる？

【「もちろん！ みんな話してね。カレンのこと、私何でも知りたいから」と言われ穏やかに。これまでもならもつと大げさなりアクションになっていたが、昨日の件で信頼が芽生え、主人公ならそう言ってくれるという確信があったので驚かない】

うん。ありがとう。嬉しい。貴方ならそう言ってくれるって思ってた。

【幸せそうに】

ふふ。私たち。これからやることたくさんね？」

⑥『二年生の十二月』秘密のアルバイト（658文字）』

「あ、いたいた！

あのね。週末の

【『デート』というだけでテンションが上がっている】

デートの話なんだけど……。

私、映画館に行ってみたいの！

【「カレン、映画好きだもんね！」と言われ。実はホラー映画マニアだけで、あとはファ
ッションや画面が可愛い映画を観る程度のミーハーなファンなのだが、知られると格好悪
いので、隠して話す】

そう！ 映画、好きなんだけど……。

いつも図書館で、見てたから。

【「そうだ、これは言っておかないと、という調子で】

そうだ。お金のことなら安心してね。

実はね、私。アルバイトしてたの。もうやめちゃったんだけど。

【「知らなかった！ 何のお仕事？」と聞かれ。ちよつと得意げに】
警備員！

織江（おりえ）……

【「と言っても、主人公には誰のことかわからないな、と気づき】

学院長の勧めでね。

【織江の口調を真似て、ちよつと意地悪に言う】

『どうせ暇なんだから少しは役に立て』

って言われていたわけ。

だから、透明になれるのを活かして、夜間見回りをしたり……。

授業中や休み時間の様子を覗いて、トラブルの有無をチェックしたり。

それを報告して、アルバイト代をもらっていたの。

スマホもタブレットもそれで買ったし。

だから、お金には困っていないから。

【ぼそつと小声で】

何十年もやってたし。

【自分としては、結構頑張ったな？　と思っている。主人公と出会うまでも、別に遊んで暮らしていたわけではない。自分は警備員であり、決して自宅警備員ではない。と強調したい】

当時は、どうせ学校から出られやしないのに、お金なんか貯めてどうするのよって思ったけど……。今は、やっておいてよかったと思うわ。

【主人公に自分の働きぶりを自慢したくてしようがない】

それに私、結構役に立っていたと思うのよ。

【主人公が申し訳なさそうに「あの……もしかしてそれって……」と切り出すので】

うん？　何か思い当たるって顔ね？

へ？　この学校に伝わる七不思議？

うんうん。

昼間でも開けっぱなしのドアが勝手に閉まるとか。

深夜の図書館でパソコンがひとりについて、怖い映画が再生されるとか。

落とし物が突然ブカッと浮いて飛んでいくのが目撃されているとか……。

【平坦に】

あーそれ私ね。私じゃなかったら怖いわね？

【主人公がとても申し訳なさそうに、しかし『言わねばならない』という調子で、「怖がられてるみたいだよ……怪奇現象だねって……」と言うので】

あ。実際怖がってる。貴方がすんなり私の正体を受け入れたのも、その噂があったから？

【ここでもうやく気付く】

え？　てことは？

何それ。私怖がられてたの？　えーっ？

【ショックでしばし間が空く。ハッ和我に返ると、必死で自己弁護をする】
でもね。それらは全部、善意のつもりで……。

【ショックでまたしばし間が空く】

私はどちらかというと……

【可愛く】

『学校の守護神』？

そういう感じのつもりだったのに！

怪奇現象なんて、あんまりよ！」

⑦『二年生の十二月』初めてのデート（491文字）』

「ぼそっと早口で。※マークまで「怖い話体験談」のようなノリで」

ええ。出来心だったの。今は反省しているわ。本当よ。

ちよっと驚かせたかっただけなの。だって貴方、最近ますます格好いいし。

なんかそれって悔しいし。

だからちよっといたずらしてやろうって思っただけなの。

【一呼吸置き。悲痛に】

なのに、まさか。初めてのデートがこんなことになっちゃうなんて……。※

【芝居がかったコミカルな雰囲気で】

ああ！ もっと早く気づくべきだったわ。思えば貴方、明らかに引きつっていたし。

私が無類のホラー好きだから、怖い映画に付き合ってくれただけ。それを理解すべきだった。

【特に誰も聞いていないが、言い訳を始める】

でも、貴方って、とても感受性が鋭いし。非現実的なこともすんなり受け入れちゃうし。

【ぼそっと早口で、突然のろけだす】

まあそこが好きなんだけど。ていうか大好き。

【一呼吸置いて。特に誰も聞いていないが、再び言い訳を始める】

とにかく。だからいけるかな？ って思ったのね？

だから私、つい言ってしまったの。スクリーンに現れたあの巨大なお化けを見て……。

【芝居がかった口調で大げさに。耳元で囁くように】

『あれって、実在するのよね……』

【いたって真面目に、ある靈感タレントのものまねをする】

やだなあ……怖いなあ……』

【声のトーンががらっと元に戻る】

って。

【一呼吸置いて。特に誰も聞いていないが、またび言い訳を始める】

でもね？ まさかそう言っただけで。

貴方が真に受けて、泡を吹いて倒れちゃうなんて思わないじゃない？

【心底いたわしい、という調子で。芝居がかった大げさな雰囲気で】

ああ……！

【映画館の医務室で、ぐったり気を失っている主人公の横で叫ぶ】

お願い目を覚まして！ ごめん嘘！ あれ偽者！ あんなのいない！

【早口でまくし立てるように】

お化けはこの通り実在するけど少なくともさつき見たのはフェイクよ！

幽霊歴の長い私を信じて！ 起きてー！

⑧『ちよつと未来』朝よ？（128文字）』

※本編のトラック1とトラック7に比べ「より親密」「気安い」感じを意識してお願いします。

【優しくゆつくりと】

おはよう。朝よ。もう、起きる時間。

【主人公が「ありがとう……おはよう……」と、よろよろと体を起こしたので満足げに】
うん。

【主人公の髪 of 寝癖に気づき。主人公に該当箇所がわかるように自分の頭を使って指さす】
あ、ここ寝癖。

【思ったより寝癖がひどいので、思わず笑ってしまう】
すごい。

ちゃんと直すのよ。

【「えーっ、そんなにひどい？ どうしよう……」と主人公が慌てているのがおかしくなり。
少し間を置いてしみじみと】

ふふ……なんだか、こういうのっていいわね。

朝起きたら、好きな人が隣にいる、って……。

【楽しみに。からかって】

今は寝癖に困ってらっしゃるけど。

【照れくさそうに。自分で言っておいて恥ずかしくなってくる】
ふふふ。

【寝癖に慌てふためいていた主人公とふと目が合い、主人公が自然に顔を寄せてキスしてきたので】

ん……ちゅっ。

【自分たちも付き合いが長くなり、自然な関係になってきたのを実感して嬉しくなる】

ふふっ。

今日も一日、頑張りましょうね？」

⑨『ちょっと未来』早く帰ってきてね（194文字）』

※実際に電話で話している感じを意識して、特別ゆっくりめにおすすめします。

【「夜、なかなか家に帰ってこない主人公から電話がかかってきて。先ほど自分がかけたときはつながらなかったたので、安堵する】

……もしもし？ よかった、つながって。

【優しく、ゆっくりと】

どうしたの？ 今、どこにいるの。まだ帰ってこられなさそう？

【「電話するのが遅れてごめんね。ちよつと嫌なことがあって……ごめんね。外で、頭冷やしてた」と言われ。主人公が自分に愚痴を言いたくないがために、一度落ち着こうと外で時間をつぶしていたことを察する】

うん？ そうだったの……。辛いことが、あったのね。

【「これまで頑張ってきたつもりだったけど、自信なくなっちゃった。私いけなかったのかもしれない。努力してるつもりなだけの、だめな人だったのかもしれない」と言われ。自分なりにカレンに頼るまいと努力したものの、結局弱音を吐いてしまう主人公がいとおしくてしょうがない】

自信なくしちゃったの？ 珍しいわね、弱音。

【「なんと言って励まそうか、考えて間を置いてから】

でも、私は早く貴方に会いたいけど。

もし貴方が……貴方の言う通り、だめな人だったとしても……。

私は貴方が居てくれるだけで、本当に幸せだから。

【「ありがとう……」と電話口ですすり泣く声が聞こえる。我慢していたのに、結局泣き出してしまふ主人公を可愛いと感じ、思わず微笑む】

ね？ だから、早く帰っていらっしやい？

暖かいもの用意して、待っているから」